

校長のひとりごと 10 (サマースペシャル)

「心に移りゆくよしなし事をそこはかたなく書き作れば…」

校長の内田です。7月22日(月)に終業式が行われ、7月23日(火)～8月25日(日)まで夏季休業に入りました。昨日の終業式の校長の挨拶では「3年前の7月26日に何が起きたか覚えている人はいますか？」から始まりました。「障害者支援施設の津久井やまゆり園で起きた大変痛ましい事件です。神奈川県ではこのような事件が二度と繰り返されないように「ともに生きる社会」の実現を目指し、「ともに生きるかながわ憲章」を定めました。この憲章は「すべての人の命を大切に」し、「差別や偏見のない」「誰もが尊重をされる」社会を作ることを目指しています。本校が行っていくインクルーシブ教育は「障害のあるなしにかかわらず、小・中・高校段階まで連続した学びの場で、できるだけすべての子どもが同じ場で共に学び育つ」という考え方で行われ、それは「憲章」の理念とは重なるものです。」というお話をしました。

もう一つは「絶対に死ぬな」です。いのちは大切です。あなたのいのちは家族や友達にとっても大切です。周りの人を悲しませることをしては絶対にダメです。」という趣旨の話をしました。夏休み明け、全員の元気な顔を見られることを祈っています。

夏休みに思っていたことを時間の許す限り伝えていきたいと思います。名付けて「サマースペシャル」今回は4回(もしかしたら5回かも)シリーズです。

ひこうか かじょう 非行化させる20ヶ条 (その1)



先日、家の片づけをしていたら一枚の黄ばんだ紙切れが…。そのタイトルは「非行化させる20ヶ条」。いや～懐かしいです。30年前くらいに保険会社の人に「おもしろいのがありますよ。」と言って、いただいたものです。いただいた当時は、私はまだ結婚前でしたが、自分が子育てするときは意識しようと思ってました。それだけでなく、学校教育に役に立てました。自分の子育ても学校教育も「子どもを育てる」という根本は同じですから。

「非行化させる20ヶ条」なんて!と思われたことでしょうか。これは、50年以上前に、米国デンバー少年裁判所が「子どもを悪くする方法」というものを発表し、世の親たちに警告を発したものです。その当時の多摩少年院の院長が、いち早くこれに注目して、翻訳して紹介しました。「こうすれば非行化しない」という「逆説的子育て論」です。長いので4回に分けて紹介します。

1. 幼い時から冷たくあしらうべし。スキンシップとか遊び相手は禁物。

乳幼児期に抱っこなどの温かなスキンシップが足りないと、情緒不安定になりやすい、キレやすい、自尊心が低いといった、マイナスの影響につながる事が指摘されています。

詳しくはわかりませんが、スキンシップで情緒を司る「オキシトシン」というホルモンが分泌されるそうです。このオキシトシンがきちんと分泌されることで怒りや恐怖心、闘争心などをコントロールしています。オキシトシンが正常に分泌されれば、他者を信頼し安心して良好な人間関係を育むことができます。一方、分泌が不十分であれば怒りや恐怖心、闘争心などがコントロールできなくなり、いわゆる「キレやすい」状態になります。



スキンシップをたくさん受けた子どもには、次のような傾向があるといわれています。

- ・愛情深く、優しい子どもになる
- ・ストレスに強い
- ・社会性が高い
- ・IQが高い
- ・協調性がある

小学校前半くらいまでの期間が重要だそうです。今、高校生にやっても手遅れかもしれません。急にスキンシップを始めたりすると、頭がおかしくなったんじゃないかって思われ、気持ち悪がられるだけなので気を付けてください。(笑)

2. 欲しいといえばホイホイと買い与えるべし。うるさく細かく親の思うまま世話を焼け。

過干渉は過保護とは異なり、「子どもの嫌がってやりたくないことを強制的にやらせる」「子どもがやりたいことをやらせない」など子どもの欲求や行動を束縛する意味合いを持ちます。子どもが間違っただけをした場合、問題のある行動を止めさせることはしつけの上で必要です。しかし、親が子どもの行動すべてを管理しようとすると過干渉に陥ってしまいます。子どもはやりたくないことを行うときに自主性や自立心が芽生えるものです。やりたくないことを強引にやらせて上手くいったときにだけ褒めたり、ご褒美をあげたりしていると子どもは、「自分のやりたいことよりも言われたことをやったほうが良いんだ」と思いこんでしまいます。このような経験を持った子どもは成長しても自立心が育たずに本来自分がやりたかったことを抑制して、親や周りの大人の評価を気にするようになってしまうのです。

3. 子どもの間違いや失敗は理由を問わず叱り飛ばせ。ひっぱたくことはいっそうよろしい。

しか かた さまざま かた
叱り方には様々な型があります。

● 否定型

「また〇〇してないじゃない！ ちゃんとやらなきゃダメでしょ」のように、「ない」や「ダメ」などの否定語をつかう言い方です。

● 詰問型

例えば、「なんで〇〇しないの？」「こんなことでどうするつもり？」などです。

● 罰則型

「〇〇しないと××だ」と脅す言い方です。罰で脅すと一時的な効果があるように見えるので、つい言ってしまう人がたくさんいます。

● 比較型

例えば、「〇〇君はいつも気持ちのいい挨拶をしてくれるよ。あんたも近所の人にしっかり挨拶しなきゃダメだよ」など、きょうだいや他の子と比べる言い方です。

● 人格否定型

例えば、「本当にずるい子だね」「情けない奴だなあ」「お前はウソつきだ」「お前はいつも口ばかりだ」「そんなこと、お前にできるはずがない」などです。これは、子どもの人格、性格、能力などを丸ごと否定する言い方です。

● 存在否定型

例えば、「お前なんかいない方がよかった」「子どもは欲しくなかったのに、できちゃったから仕方なく生んだ」などです。これはその子の存在そのものを否定する言い方です。

ひっぱたくのは問題外。今の時代「虐待」と言われます。どんな状態であっても親子は似てきます。自分の親に言われたこと、やられたことは友人に、その子どもにやります。

4. しつけと教育の責任は保育園や学校に任せっきりにするべし。

しつけの基本は家庭だと思っています。特に大事なのは幼少期まで。「三つ子の魂 百まで」とのことわざもあるように、幼少期で身についたものが基本となって、年齢を重ねていくように思います。善悪の理解もそうです。ある小学校で「はしの持ち方が悪いのは学校の責任。ちゃんと教えろ。」と言ってきた保護者がいるそうです。どうなのでしょう？学校では他人がいる集団でのルールや言動を教えます。勉強も教えます。様々なことを教えますが、何から何までは教えられません。家庭の教育力が低下しているように思えてなりません。放棄している家庭も現実にあるようです。



5. お小遣いが欲しいと言ったら、それが必要なものとわかっていても必ずことを言
って渡すべし。

「参考書が必要だからお金が欲しい。」「このお金があればいいお肉が買えるのに…」、
「給食費をちょうだい。」「なんで給食費なんて払わなきゃいけないんだ。食べなきゃい
いのに…」不必要なものならばまだしも、必要なものにこう言われてしまうと嫌な気分
になりますよね。大人でもそうです。必要なら黙って渡したいものです。

だいぶ長くなってしまったので今日はここまで。またこの続きを書きたいと思います。
叱り方の中の「詰問型」一応は質問する形になっていますが、子どもからの回答を期待
しているわけではないんですよ。その証拠に、「なんで〇〇しないの？」と言われた子
どもが、「だって、〇〇だもん」と答えれば、親の多くは「言い訳するんじゃない」「な
んで言い訳するの!？」とさらにキレますから（怖）。子どもが仕方なく黙っていると、親は
「なんで黙ってるの!？」と…。結局、何を答えても答えなくても怒られる。やるせないで
す。

今日はここまでです。